



歌詞の響きとは何か

——音声詞学入門

木石 岳

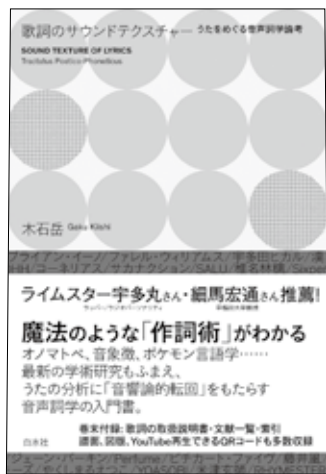
(音楽家)

歌詞はその言葉とは別に、音の響きで私たちに何らかの印象を与えている。

しかし、その「響き」とはいったい何なのか？

音楽家・木石岳氏が提唱する「音声詞学」を手がかりに、

歌詞の面白がり方の新たな扉を開く。



「歌詞のサウンドテクスチャー
うたをめぐる音声詞学論考」
木石 岳／白水社 2023年
歌詞には響きがある。この歌詞は明るい響きだとか、響きが気持ちいいとか、好きだとか……。しかし、その響きは何なのか、どこからくるのか、私たちは語る術をあまり持っていない。音楽家として作詞・作曲・編曲、プログラミングなどで幅広く活躍する著者が、言語学、音声学、認知心理学、脳科学の視点から、人気アーティストたちの歌詞の響きを論ずる。

歌を聴いて、その歌詞について感想を語る。誰もが何げなくやっている行為であろう。だがそこには落とし穴がある。私たちはほんとうに、聴いたままの感想を述べているのか。実はそれは、歌詞を読んだ感想ではないのか。

あるいはまたこんな経験がないだろうか。ある曲の、あるフレーズに歌詞の単純な意味内容にはおさまりきれない何かを感じる。けれども「あのサビの前半、なんかいいよね」くらいしか、その感動を表現できない。

こうしたことに少しでもピンときた方にとってつけの本がある。エレクトロニカ・ユニット macaroon で作詞・作曲を担当し、ドラマや映画に主題歌を提供、劇伴作曲も行うなど幅広く活躍する音楽家・木石岳氏の『歌詞のサウンドテクスチャー うたをめぐる音声詞学論考』（白水社）だ。同書で木石氏は、「音声詞学」を提唱し、汲めども尽きない歌詞の面白みを分析する方法を探求しているのだ。

音の編み物に分け入る道具

——はじめに木石さんが創案した音声詞学について教えてください。

木石 音楽の作り手として、歌詞の様々な評論

だけにややこしくなっていました。

——著書には音声学ではなく言語学の話題も豊富に出てきますが、もともと関心があったのですか？

木石 そうでもないですが、最初は言語学者のロマン・ヤーコブソンの『音と意味』についての第六章」という講義録が本になっているのを読んだ時に、興味を持ったという感じです。

そこには音素対立のことが書いてありました。言葉には鈍い響きと鋭い響きがあり、このふたつが対立状態にある時、鋭い響きは軽さや明るさを想起させ、鈍い響きは重さや暗さ、丸みを想起させるみたいなことがフワツと書かれているんですね。音そのものが何かを想起させる、つまり〈音象徴〉について触れている。

僕は「これは歌詞の話だな」ってめちゃくちゃ思いました。たぶん音楽を作っている人ならみんなそう感じると思うんですけど。ヤーコブソン自身、音象徴性というのは（ここではポエムの方ですが）詩においていちばん「魔術」を発揮させると言ってるんです。そこから歌詞の響きについてもっと気になりだして、言語学の方から手がかりを得ていったという感じです。サウンドテクスチャーという言葉もヤーコブソンからの引用です。

や批評についての話を読み聞きしてきましたが、どれもじっくりこない感じがずっとありました。歌詞をテキストとして引用し、その文学的な意味を論じるのが主流だからです。

僕自身は、歌詞の「響き」を大事にして作詞をしています。そういう話を音楽関係者やミュージシャン同士ですると「あつ、響き重視派ですね」みたいな反応が返ってくる。でも、そういう話ではないんです。

例えば、僕が中国語の歌を聴いたら、純粹に音響的な体験をすると思います。なぜなら僕は中国語がわからないからです。そうすると、サウンドだけ取り出して音楽的に分析することもできるでしょう。

でも日本語の歌詞を聴いた時には、どうしてもサウンド的な体験とテキスト的な体験が同時にきますよね。それは不可分だということ感覚があります。響きと意味とどっちが大事か、という話じゃないんです。サウンドだけを抽出できないし、意味情報だけでも抽出できない。

そこでテキストとサウンドを複合的に分析す

——木石さんの著書では音声詞学的に分析するための様々な道具が導入されています。例えば、音象徴に加え、〈音響サブリミナル〉という言葉を使われますが、これは聴き手の無意識に訴えるような効果を指すのですか？

木石 そうですね。知らず知らずに、くらいの意味です。歌詞の響きの印象が、言葉の意味と衝突して、何か具体性を持ったイメージを引き出すことをそう呼んでいます。

——サブリミナル効果といえば、広告に用いることが禁じられていますが、そういうおっかないものではないのですか？

木石 作り手側としてはごく当たり前にやっていることです。呼び名は、ちょっと怖がらせるつもりで作った言葉ですが（笑）。

——また、歌詞の文学的な意味内容が最も強く出る〈完全言語詞〉から、逆に響きの効果が最大になる〈完全音声詞〉まで四つの段階を式で表されています。ふだん漠然と語ってしまいがちな歌の歌詞や響きが持つ効果を、分析的に語れるようになると思います。本を読まれた方の中から、こういう批評の道具が手に入ったら嬉しいといった反応はありませんでしたか？

木石 それがねえ、あんまり聞かないですね。大学の先生方がおっしゃってくれることはよくあ

る視点が必要となります。それを僕は音声詞学と名づけてみました。この視点で扱う、響きと言葉の意味の重層性みたいなものを〈サウンドテクスチャー〉と呼んでいます。

——わざと学問っぽくしてみました。

木石 そう、名前を付けて後悔してるのは、「歌詞を音声学で見るといいですね」みたいに受けとられてしまいがちなことです。みんなが思っている音声学って口の中の舌の動きとかをあれこれ言うような、いわゆる調音音声学のことでしょう。たしかにそのような意味での音声学も大事な要素ですけど、それだけで見るとはありませぬ。この本には音声学の話がしばしば出てくる

りますが。作り手からは聞かないです。

僕が作り手として利用することはめちゃくちゃありますよ。この本で書いた、言語詞と音声詞の対立の中でのいかに音声詞っぽさを強調させるかとか、子音と母音、有声音と無声音の対立を作る時に、いったん僕がまとめたのを参照して、意図的に音素を配列していく、みたいなことはやります。自分の楽曲制作の場面で助かっている感じがありますね。

——様々な楽曲を分析、解説するために、著書では音源が聞けるQRコードをつけ、また、譜例の書き方も独自に工夫されています。

木石 はい。五線譜があつて、その下に日本語の文字が書いてあるんですけど、これは基本的にオフイシャルな歌詞カードに書いてあることを仮名書きしたものです。その下に、発音もしくは音素記号を書いています。こっちはなるべく「聴いたまま」を書いているわけです（P49 譜例参照）。なぜこうしたかというと、実際には歌詞カードのとおりに歌っていないケースがしばしばあるからです。

——坂本九の「上を向いて歩こう」（作詞／永六輔 作曲／中村八大 一九六一年）の例が出ていました。歌詞の「うえをむいて」を「ウヘホムフイテ」と歌っていると。